第2学年 読むこと①

時間的な順序や事柄の順序を考えながら、内容の大体を読み、文章の内容と自分の経験を結び付けて、自分の考えをまとめること

つまずきの実態
～こんな児童の姿が見られませんか？～

長文になると、「問い」に対する「答え」の部分が的確に見分けられない。

本文
②あそび方の一つに、「てつぼうよりむこうにげてはだめ。」など、にげてはいけないところをきめるものがあります。

T：②段落の遊び方はどんな遊び方と書いてありますか。
C：「鉄棒より向こうに逃げてはだめという遊び方です。」

「問い」が、「どんな遊び方があるのでしょう。」であるので、あそび方というキーワードには気付いているが、本文の「　　。」の中は１例で、最後のものという言葉で置き換えてあることに気付いていない。

実践の概要

単元名　知っていることとつなげて読もう
『おにごっこ』光村図書

目標	説明的文章の典型である、「話題提示－事例の列挙－まとめ」という構成を理解し、「問い」に対する「答え」の部分を読み取りながら、「まとめ」の中の大切な文章がわかる。
内容	• 事例の中の「答え」の部分を、カギになる言葉をポイントに読み取っていく。 • 経験とつなげて「答え」の部分を読み取りながら、内容に対する自分の意見を発表する。 • 「まとめ」の部分の中の大切な文章を考える。　• 自分でも遊びの説明をする文章を書いてみる。

学習内容の系統と各学年に見られるつまずき

	学習内容（単元名）		つまずきの実態
第6学年	自分の感じたことを、朗読で表現しよう	→	作者の思いを読み取るだけになって、自分の経験や思いを関連付けて、読みを深めることができない。
第5学年	説明の仕方の工夫を見つけ、話し合おう	→	• 本文をもとに文章の構成・構造をとらえられない。 • 自分の考えを述べるときに、自分の知識や経験と結び付けながら説明することができない。
第4学年	段落どうしの関係をとらえ、説明の仕方について考えよう	→	段落相互の関係を考えたり、叙述を自分の経験や知識と関係付けて主体的に読み深めたりできない。
第3学年	心にのこったことを、自分の言葉で表そう	→	伝えたいことを条件に合わせて、まとめて書くことができない。
第2学年	**知っていることとつなげて読もう**	→	**長文になると、「問い」に対する「答え」の部分が的確に見分けられない。**
第1学年	おはなしのおみせやさんごっこをしよう	→	自分の経験と結び付けて想像豊かに読み、自分の考えをまとめたり広げたりできない。

単元末の目指す姿

- 「問い」に対する「答え」の部分を読み取るときに、カギとなる言葉をポイントに読み進めることができるようになる。
- 「答え」の部分を読み進めるに従い、「まとめ」の中の筆者の伝えようとしている文章がわかるようになる。

つまずき解消に向けた指導の工夫 ❶

キーワードをもとに「問い」に対する「答え」の部分を見つける活動を行う。

活動のねらい▶ • 指示語や接続語等に着目して説明の部分と「答え」の部分を見分けることができる。

ここがポイント

- 「一つに」「～があります」など、説明の部分と「答え」の部分を見分けるためのキーワードについて、探し方を全体で確認した後、各自で探させる。
- 児童が探したキーワードを全体で出し合い、「どのような箇所で使われているか」「他に同じように使われているところはないか」などの発問を通して分類・整理しながら、説明の部分と「答え」の部分を見分ける視点を明確にする。

授業の様子

「にげてはいけないところをきめるものがあります」の「～があります」と書いているので、ここが「遊び方」の部分だと思います。

他にも「～もあります」と書いてあるところがあるよ。ここも「遊び方」が書いてあるのかな。

（期待される児童の姿）

指示語や助詞・文末・接続語・何度も使われている言葉などのポイントに基づいて考え、「答え」の部分を見つけることができる。

つまずき解消に向けた指導の工夫 ❷

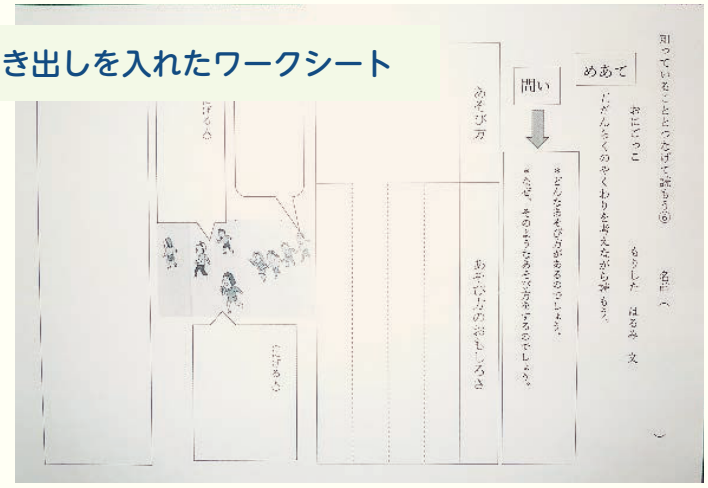
自分がした時のことを想起しながら挿し絵にふき出しを付け加え、本文に返って読み進める活動を行う。

活動のねらい▶ • 自分の知っていることや経験したことと関連付けながら読むことで、本文で説明している内容が具体的にどのようなことを表しているのか想像できるようにする。

ここがポイント

- ワークシートに、本文の挿し絵の子どもたちがどう言っているかを想像して書く。
- 本文中から、ふき出しの内容と似た言葉を探し、その文章が何を伝えようとしているのかを考える。

ふき出しを入れたワークシート



（期待される児童の姿）

自分の経験を思い出しながら本文を読むことで、内容をより近く感じる。そのようにして読み進めていくに従い、「なぜ様々な遊び方があるのか」という、「まとめ」の部分での筆者の考えについて、本論の部分と関連付けて考えることができるようになる。